

いわゆる過疎地域の家族関係（3）

——中学生の社会移動観に関する地域差の検討——

植村勝彦・続 有恒ほか過疎研究グループ

I 問題

既に報告したように、われわれは昨夏来、いわゆる過疎地域と称せられる地域に出向き、過疎化に伴う生活の様々な側面についての意識、態度を、世帯主を中心とする面接調査によって採集してきたが、それとともに、村内の中学生に対しては質問紙を用意し、調査を行なった。本稿は、その結果の一部を報告するものである。^{**}

世上、過疎現象が耳目をひいて数年になるが、各学問領域からの地道な研究は今やその緒についたばかりである。したがって、各分野の成果を見守り、早計な批判を加えることは厳に戒めねばならないが、ただしかし、人口学、地域開発、農業経済、等々のマクロな分析によって過疎現象が把握され、行政的施策に供せられたとしても、米山がいうように、過疎現象を現代日本における「文化変化」⁽²⁾として捉え、その渦中に巻込まれた人々の実存にかかわる、すぐれて今日的な人間の問題として考える視点のないかぎり、真の解決には至らないであろう。たとえ、過疎問題の中心課題が、人口論的過疎を経て社会的過疎、経済的過疎を含む地域論的過疎に移行していく段階、およびその結果にあるにせよ、「人間の問題」として過疎問題を捉えるわれわれの立場からは、人口論的過疎自体、関心の枠外のものとして放置してよい問題では決してありえない。今井のいうように、「過疎病」⁽³⁾の初期症状が村の青年層の流出に現れるという現実をみれば、今後の村の動向を左右する彼らの意志決定のメカニズムは、家族内の意志決定に、さらには家族間の関係に重大な意味をもつであろう。次三男および女子の流出は、村内分家の不可能な家においては昔から行なわれていたことであるが、過疎地域の一般的特徴のひとつは、長男長女すら離村していくという現実にある。そして、こうした青年たちの流出が、人口の社会減のみなら

* 面接による採集資料は、「名古屋大学教育学部教育心理学科研究資料」として、紀要とは別途に、既にNo. 4まで公刊している。

** 本研究の一部は、日本教育心理学会第13回総会（1971年、神戸大学）において、続 有恒、永田忠夫とともに、一連のテーマで報告した（大会発表論文集 pp382～387）。

ず自然減と直結するところに、人口論的過疎が地域論的過疎へと移行する重大な鍵を握っているのである。

こうした観点から、われわれは過疎地域の中学生を「流出予備軍」として位置づけ、今回は彼らに社会移動観（村の青年たちの流出理由の認知、成人たちの留村理由の認知）を問うことを試みた。何故ならば、既に報告されているいくつかの調査結果や、後述するわれわれの調査からも知られるごとく、将来村で生活することを意志表明する者は極めて少なく、地域による多少の差はあるものの、高々10%前後であることをみれば、社会移動観は即彼ら自身の態度表明であると考えられるからである。本論文は、こうした人口流出の渦中にある中学生の社会移動観の一般的傾向を探るとともに、形態を異にするといわれる過疎地域類型（中国地方の拳家離村型、東北地方の常時出稼ぎ型、中部地方の中間型）によって、そこに居住する中学生たちの社会移動観に地域差がみられるか否か、を検討しようとするものである。

II 方 法

1. 質問紙の作成

先の目的に従い、若者たちが都会へ出て行く理由、および大人たちが村に留っている理由について、過疎問題を扱った諸資料を参考しながら、それぞれ項目を作成した。質問形式は、自己の意見を反映させつつ、居住している地域の特性をより鮮明に表現させうる可能性の点から、村の若者および村の成人「一般」の、流出および留村の「認知」を問う方式を採用了。すなわち、たとえば「次の意見は、ある山村の若い人たちが“なぜ都会に出て行くか”その理由について調べたものです。これら

* 従来、人口移動は、社会学、人口学の立場からは、社会的、経済的階層間の流動性（社会的移動）と、地域的（地理的）移動が区別されて用いられてきたが、都市化現象の著しい今日の社会では、地理的移動は必然的に様々な社会的関係の変更を伴うわけであり、また、それ故に、われわれの研究対象として浮び上ってくるのである。こうした観点から、社会的、地理的移動の両者を包括して、流出および留村を表す用語として「社会移動」なる言葉を用いている。

いわゆる過疎地域の家族関係(3)

の意見が、あなたの村の若い人たちの“都会へ出て行く理由”とどれほどあてはまると思ひますか」と問ひ、「たしかにそうだ」から「全然あてはまらない」に至る5段階の尺度で評定させた。これは「村の大入たちの留村理由」についても同様である。なお、それぞれの質問項目は附録として本稿の末尾に添付した。
^{*}

2. 調査地域・方法

序報（その1）に報告したごとく、長野県下伊那郡上村（上村中学校）、山形県最上郡大蔵村沼台地区（沼台中学校）、愛知県北設楽郡富山村（富山中学校）、島根

県飯石郡頓原町（頓原中学校、志々中学校）において実施された。調査方法は、われわれが直接調査のためにそれぞれの現地へ出向く半月程前に調査用紙を郵送し、授業との調整のうえで適宜実施してもらひ、われわれが現地に到着した際に一括して渡してもらう方式を探った。したがって、実施期日は、既報の直接調査期日の数日前ということになる。

3. 調査対象

上記4地域の中学生全員であり、その内訳は表1の通りである。
^{*}

表1 調査対象内訳

		1年生	2年生	3年生	計
上 村	男	13 29	16 32	13 30	42 91
	女	16 29	16 32	17 30	49 91
大 蔵 村	男	7 13	10 20	12 17	29 50
	女	6 13	10 20	5 17	21 50
富 山 村	男	2 5	3 8	7 12	12 25
	女	3 5	5 8	5 12	13 25
頓 原 町	男	38 78	41 83	59 102	138 263
	女	40 78	42 83	43 102	125 263
計	男	60 125	70 143	91 161	221 429
	女	65 125	73 143	70 161	208 429

III 結果および考察

1. 卒業後の進路ならびに生活希望地に対する自己の態度と親の期待の認知

いわゆる過疎地域の中学生たちの目に映った、村の青年の流出および成人の留村理由の認知を論ずるにあたって、まず彼ら自身、卒業後如何なる進路をとろうとしているのか、また、将来何処で生活を営もうとするのか、そして、それに対して、親はどのような期待を抱いていると認知しているか、を明らかにしておく必要がある。表2、表3は進路について、表4、表5は生活希望

地について、それぞれ自己の態度と親の期待の認知を求める結果を示している。

卒業後の進路について、一般に進学希望率が低く、就職希望率の高いことが特徴として挙げられる。このことは性差、学年差とともに大きな変化はない。地域に焦点を当てれば、大蔵村と頓原町は対照的な結果を示し、地理的にも近接する上村と富山村は類似した傾向を表している。4村とも村内に高校を有していないが、富山村、頓原町は隣村（町）に高校があり、通学が可能であるのに対し、上村、大蔵村はそれが出来ず、下宿せねばならない条件の差はある。それにしても、条件差を離れて上村と頓原町が類似の傾向を示すのに対し、大蔵村の姿は極めて特徴的である。一方、親の期待の認知では、「就職」は4村ともに自己の意見よりも低くなっている。しかし、それは必ずしも「進学」へ移行しているのではない。

* 大蔵村については、村内に5校の中学校があるが、調査は沼台中学校についてのみ行なわれた。また、頓原町には上記の2中学校があるが、分析においては合せて扱っている。

* 本調査は「調査I」および「調査II」でもって全体を成している。本稿は「調査II」を分析したものである。ただし、以下に述べる表2～5の質問は「調査I」に属するものであり、分析の都合上借用した。なお、「調査I」は卒業後の進路、将来の居住地、親の期待の認知、行動圏、村および都会の長所短所等を問うるものであるが、その実際は「研究資料No.1」を参照されたい。

原 著

表2 中学卒業後の進路

	全体	地域別				性別		学年別		
		上村	大蔵村	富山村	頓原町	男子	女子	1年	2年	3年
1. 中卒後就職したい	31.2%	44.0%	52.0%	44.0%	21.7%	30.3%	32.2%	28.0%	35.7%	29.8%
2. 高校まで進学したい	40.4	38.5	16.0	32.0	46.0	38.5	41.8	40.8	32.9	46.0
3. 大学まで進学したい	10.7	6.6	2.0	0.0	14.8	14.0	7.2	8.8	7.7	14.9
4. まだ決っていない	2.6	1.1	0.0	4.0	3.4	2.3	2.9	2.4	2.1	3.1
無 答	15.4	9.9	30.0	20.0	14.1	14.9	15.9	20.0	21.7	6.2
計(人数)	429	91	50	25	263	221	208	125	143	161

表3 中学卒業後の進路に対する親の期待の認知

	全体	地域別				性別		学年別		
		上村	大蔵村	富山村	頓原町	男子	女子	1年	2年	3年
1. 中卒後就職してほしいと思っている	16.6%	33.0%	34.0%	20.0%	7.2%	15.4%	17.8%	11.2%	15.4%	21.7%
2. 高校まで進学してほしいと思っている	45.2	38.5	10.0	40.0	54.8	46.6	43.8	37.6	42.7	53.4
3. 大学まで進学してほしいと思っている	11.4	9.9	0.0	0.0	15.2	14.9	7.7	12.8	8.4	13.0
4. 親がどう思っているかわからない	6.3	5.5	4.0	16.0	6.1	6.8	5.8	7.2	7.7	4.3
無 答	20.5	13.2	52.0	24.0	16.7	16.3	25.0	31.2	25.9	7.5

く、「無答」の増加となって現れているところに特徴がある。大蔵村がその典型であり、また、進学に対する親の期待の認知は極めて低い。われわれの世帯主に対する面接時の印象でも、月々の相当な下宿料負担をしてまで進学させようとする教育への意欲は窺えなかったし、子ども自身それを敏感に感じとっているが故に「親がどう思っているかわからない」という反応ではなく、「無答」に傾いたのであろう。子どもを高校に出すと知恵がついて考えが変り、折角いま、家の仕事をしようという気になっているのに心が変ってしまいそうだから、という親の考え方をこの表の結果がよく表している（この点に関しては「序報（その1）」参照）。

次に、将来の生活希望地について、まず自己の態度では、留村意志を示す者は1割足らずであり、大半が一度は都会に出ることを希望している。ここに、既に述べたように、彼らを流出予備軍として位置づける背景があるわけである。地域別にみれば、留村に関して自身および親の期待の認知ともに際立って低い値を示す上村と富山村は、両村が中部山岳地帯の伊那谷の系列に属し、村内に耕作可能な土地は全くといってよいほど無く、山林労務が主とならざるをえない状況にある。そして、このことが表の如き結果を生んだものと推測される。それに対して、農山村としての大蔵村、頓原町では、主観的にはともかく、村内で農業を主体とした経営が出来ないわけ

表4 将来の生活希望地

	全体	地域別				性別		学年別		
		上村	大蔵村	富山村	頓原町	男子	女子	1年	2年	3年
1. 中学校（または高校、大学）を卒業したらずつと村にいたい	9.3%	2.2%	20.0%	0.0%	10.6%	11.8%	6.7%	12.8%	7.7%	8.1%
2. 若いうちは都会に出て働きたいが、いずれは村に帰りたい	23.3	24.2	14.0	4.0	26.6	24.4	22.1	29.6	21.7	19.9
3. 将来とも村に帰るつもりはない	12.8	15.4	6.0	12.0	13.3	14.9	10.6	8.8	15.4	13.7
4. 都会に出て働きたいが、遠い将来のことはまだ考えていない	33.6	41.8	20.0	72.0	29.7	27.6	39.9	26.4	34.3	38.5
5. 卒業後のこととはまだ決っていない	19.3	16.5	32.0	12.0	18.6	19.5	19.2	20.0	19.6	18.6
無 答	1.7	0.0	8.0	0.0	1.2	1.8	1.4	2.4	1.4	1.2

いわゆる過疎地域の家族関係(3)

表5

生活希望地に対する親の期待の認知

	全体	地域別				性別		学年別		
		上村	大蔵村	富山村	頬原町	男子	女子	1年	2年	3年
1. 村に残ってほしいと思っている	9.6%	3.3%	28.0%	0.0%	9.1%	11.3%	7.7%	9.6%	9.8%	9.3%
2. 都会で就職して、ゆくゆくは親を都会に呼んでほしいと思っている	6.5	16.5	2.0	12.0	3.4	6.3	6.7	9.6	6.3	4.4
3. 若いうちは都会に出てもいいが、ゆくゆくは村に帰ってほしいと思っている	15.9	22.0	6.0	12.0	16.0	17.7	13.9	16.0	16.8	14.9
4. 子どものことは子どもの自由に任せている	25.4	19.8	26.0	32.0	26.6	25.8	25.0	13.6	26.6	33.5
5. 親がどう思っているかわからない	40.6	38.5	36.0	40.0	42.2	36.7	44.7	48.8	39.9	34.8
無 答	2.1	0.0	2.0	4.0	2.7	2.3	1.9	2.4	0.1	3.1

ではなく、それがこの結果となって現れたのであろう。親の期待の認知では、「親がどう思っているかわからない」と答える者が意外に多く（学年の上昇に伴って減っているが）、過疎化状況下に置かれながら余り家庭内の話題となっていないらしいことが知られる。

以上のような全体および地域特徴を踏まながら、流出、留村に対する認知についての以下の論を進めていくこととする。

2. 青年の流出理由の認知

イ 項目別地域特徴

青年の流出理由の認知について、地域、性、学年別に15項目それぞれの平均値および標準偏差値を求めたものが表6である。まず全体を通じて、青年たちが村を離れていく理由の認知として高い値を示している項目をみると、都会で就職したほうが収入がよいから(12)、村においては新しい知識や技術を学ぶことができないから(3)、若いうちにいろいろ世間をみておきたいから(10)、都会の生活は文化的で、何かと便利だから(15)、等が挙げられる。一方、低い値を示す項目としては、ひとり村に残るのは何となくバカな人間のように思われるから(2)、村には話し相手や仲間がないから(4)、都会の仕事のほうが危険が少なく、楽だから(11)、都会ではめんどうなつきあいをしなくてもよいから(7)、等が主に挙げられ、これらを比較すれば、彼ら中学生の目に映っている青年たちの流出理由の一般的傾向は、留村に伴う対人接触の寂寥感や煩瑣性というネガティブな評価の結果というよりも、都会のもつ魅力的なポジティブな側面への志向がその背景になっているとして認知されているといえよう。そして、このことは、流出予備軍である大半の彼ら自身の意見の反映であるとみなしても間違いではなかろう。

次に、項目別に地域差の有無を明らかにすべく、各項目の分布の正規性、分散の等質性を確認したうえで、Ryan法により地域による平均値の差の対比較検定を行

ない、表6の結果を得た。^{*}そこで得られた有意な差が地域の差であるといふには、他の分類基準で求められた差よりも大である必要がある。そこで、今回の調査で外的基準として取上げた性および学年別にも検定を施した。^{**}表にみられるごとく、項目3、15は性差としても現われ、必ずしも地域差とはい難いので、これら2項目に

表7 地域別男女平均値

		3	15
上村	男子	4.21 (0.94)	3.93 (0.88)
	女子	4.22 (0.68)	4.18 (0.72)
大蔵村	男子	3.83 (0.95)	3.69 (1.09)
	女子	4.14 (0.94)	4.05 (1.17)
富山村	男子	3.75 (0.83)	3.58 (0.64)
	女子	4.46 (0.50)	3.92 (0.62)
頬原町	男子	3.59 (1.15)	3.50 (1.06)
	女子	3.86 (1.08)	3.65 (0.96)

* 村内中学生の全数調査（大蔵村は沿台地区のみ）ゆえ、検定は不要とすることも考えられるが、われわれは、母集団として、「問題」の項にも述べたごとく、東北型、中国型、中間型の過疎地域類型を背後に想定しているため、それらの地域からのサンプルとして4村を抽出したわけであり、したがって、検定を行なう立場に立つ。

** 地域差と断定しうるためには、3要因（地域、性、学年）の分散分析を全項目に行なってみるのが望ましいが、地域のサンプル数に大きな開きがあるため（表1参照）、周辺度数の均等性が保証されず、分散分析は行なわなかった。

表6

青年の流出理由の総対数の外的基準別平均値と差の検定

	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15
全 体	3.65 (1.02)	2.48 (1.15)	3.88 (1.05)	2.62 (1.15)	3.46 (1.07)	3.34 (1.10)	2.66 (1.06)	3.50 (1.09)	3.41 (1.04)	3.80 (1.03)	2.64 (1.10)	3.94 (0.99)	2.72 (1.05)	3.49 (1.07)	3.72 (0.99)
上 村	3.64 (0.92)	2.43 (1.07)	4.23 (0.81)	3.04 (1.06)*	3.64 (0.92)	3.41 (0.99)	2.92 (0.95)	3.74 (1.05)	3.56 (0.99)	4.12 (0.92)	2.80 **	4.02 **	2.75 **	3.71 **	4.07 **
大 蔵 村	3.64 (1.07)	2.56 (1.20)	3.96 (0.96)	2.56 (1.04)*	3.34 (0.99)	3.44 (1.02)	2.76 (1.03)	3.84 (0.92)	3.32 (1.01)	4.16 (0.83)*	2.70 (1.19)	3.36 (1.16)	2.78 **	3.56 **	3.84 **
富 山 村	3.68 (0.88)	2.08 (0.84)	4.16 (0.73)	3.48 (0.85)*	3.48 (0.85)	3.28 (0.78)	2.64 (0.78)	3.44 (0.89)	3.16 (0.80)	3.64 (0.73)	2.72 (1.00)	3.84 (0.73)	2.68 (0.73)	3.52 (0.73)	3.72 (0.66)
頓 原 町	3.65 (1.05)	2.52 (1.18)	3.72 (1.13)	2.41 (1.14)	3.42 (1.14)	3.31 (1.17)	2.54 (1.17)	3.35 (1.17)	3.40 (1.13)	3.64 (1.09)	2.56 (1.06)	4.03 (1.13)	2.71 (1.06)	3.40 (1.08)	3.57 (1.01)
男 予	3.62 (1.03)	2.55 (1.16)	3.76 (1.10)*	2.69 (1.19)	3.38 (1.11)	3.22 (1.11)	2.67 (1.11)	3.43 (1.14)	3.30 (1.14)	3.71 **	3.71 **	2.66 **	3.89 **	2.80 **	3.61 **
女 予	3.68 (1.00)	2.40 (1.13)	4.01 (0.98)	2.54 (1.09)	3.54 (1.02)	3.48 (1.07)	2.64 (1.07)	3.56 (1.01)	3.52 (1.03)	3.89 (1.01)	2.62 (0.98)	4.00 (1.08)	2.64 (0.95)	3.54 (1.03)	3.83 (1.05)
1 年	3.65 (1.00)	2.42 (1.25)	3.80 (1.15)	2.57 (1.17)	3.44 (1.08)	3.09 (1.18)*	2.76 (1.18)	3.40 (1.16)	3.34 (1.10)	3.76 (1.15)	2.61 (1.11)	4.05 (1.10)	2.79 (0.97)	3.42 (1.06)	3.72 (1.04)
2 年	3.64 (0.97)	2.55 (1.13)	3.97 (1.00)	2.61 (1.13)	3.50 (1.07)	3.46 (1.11)	2.61 (1.11)	3.48 (1.06)	3.48 (1.10)	3.73 (1.01)	2.59 (1.08)	3.85 (1.11)	2.65 (1.05)	3.45 (1.06)	3.76 (1.00)
3 年	3.65 (1.06)	2.46 (1.09)	3.86 (1.00)	2.67 (1.14)	3.44 (1.00)	3.43 (1.07)	2.63 (1.00)	3.58 (0.97)	3.53 (1.07)	3.89 (0.97)	2.71 (0.90)	3.94 (0.95)	2.73 (1.02)	3.57 (1.09)	3.68 (0.95)

(注1) カッコ内は標準偏差を示す

(注2) 地域及び学年別の平均値の差の検定はRyan法、性差はT検定による
危険率: ***Pr<.001; **Pr<.01; *Pr<.05

(注3)

いわゆる過疎地域の家族関係(3)

ついて地域と性の組合せで平均値を求めた結果が表7である。地域差のみられた上村と頓原町を比べれば、男女差に増して地域差の大きなことが両項目に現れており、他の有意な差を示したものと同様、地域差を表す項目として扱うこととする。

有意な差のみられた項目の殆ど全てに上村と頓原町が関与し、しかも後者が全て低い値を示していることから、両地域の流出理由の違いおよび、それを規定している地形的、社会文化的な過疎形態の相違が推測される。流出理由に則して上村の特徴を挙げれば、序報(その1)に述べたように、第一に山岳村としての地形的隔絶性、第二に昭和28年の水害を契機とする名古屋市およびその近郊への集団離村者(開拓団)との血縁、地縁を通じての交流、第三に中学生の親自身、現在の家を継ぐ前に村外で働いた経験の持主の多いことによる、彼らの「都会観」の子供への伝達、といった点であろう。これらが相互に働いて、都会のもつ文化性への志向として現れ(7, 8, 15)、手に職をつけて立ち向う場として位置づけ(3)、また、一度は見知りおくべきところ(10)と考えるのである。一方、頓原町は中国準平原の麓の準平地農村であり、大田市に隣接し、また、国道54号線を介して松江あるいは三次、広島に容易に通じ、住民の都市への接触度は極めて高い。こうした事情が意識のうえで都市との落差をなくし、都市のもつ文化性を求めての流出は低くなるのである。また、既に述べたように、頓原町、大蔵村が農業を主体とするのに対し、上村、富山村は村内には林業労務しか仕事がない、それに就かなかいかぎり離村せざるをえず、その相違が話し相手や仲間のいないこと(4)、として明瞭に現れている。以上より、少なくとも意識のうえでは都市化傾向の強い頓原町の青年たちの流出理由は、彼ら中学生が15項目中最高の値を与えた、都会における収入のよさ(12)に求められ、一方上村では、都会のもつ文化性、収入のよさ、等もさることながら、技術を身につけ、自立できる職を求めて都会に食込もうとしていると考えられる。われわれの面接訪問先においても、都会に出た血縁者(特に子ども)が大工、理容師、美容師、修理工となっている家が目立って多かった(他地域に比べて)ことからも首肯できる結果である。それに対し、東北の、出稼ぎ型過疎形態をとるとされる大蔵村においては、上村と同様地形的隔絶度はかなり高いが、上村と異なる点は、その隔絶された小宇宙の中で安定した営みをしていることである。それ故、都会とは遠く彼方に位置し、自村とは冬期の出稼ぎを通じてのみ連がりをもつ處であり、出稼ぎついでに若いうちに一度はみておく処(10)として映っているようである。した

がって、都会のもつ文化性への欲求はみられるものの(8)、都会で就職するほうが収入がよい(12)という発想は乏しく、既にみたように、他村に比して著しく高い留村希望および親の期待の認知等から、彼らは現在の生活空間の状況に不満を抱いてはいないものと察知される。同じ農業を主体とする頓原町とのこうした相違が、いわゆる東北型と西南型の過疎形態の差異の例証なのかも知れない。⁽³⁾

なお、富山村に関して特徴的なものはないが、15項目それぞれの値が上村と酷似しており、地理的にも同一であることからして、上村の流出理由と大きくは異らないと考えられる。

各地域における「都会」の意味するものはそれぞれ若干異なることが予想されはするものの、以上にみたごとく、青年の流出理由の認知には、明瞭さの度合はともかく、地域差に基く相違が、項目によっては窺われるものがあることは確かである。

□ 流出類型の抽出

個々の項目を離れて、若干層流出の構造的類型を抽出するべく15項目の内部相関行列を求め(表8)、主因子解法により因子分析を行ない^{*}、得られた5因子に粗バリマックス回転を施し、表9の結果を得た。5因子で全分散の50%強を説明しており、また、特に大きな固有値をもつ因子もなく、類似した値を示していることが知られる。

第I因子は項目番号11～14に高い負荷量を示し、都会での職業の収入および仕事内容の好もしさを表わしている。

第II因子は、6, 8, 15, 9等の項目の負荷量が高く、都会の文化性、便利さ、快適さといった、生活の文化的享受の志向を意味している。

第III因子は、項目番号10, 3, 9, 14等に代表され、実像、虚像を含めた、都会のもつイメージへのあこがれを実現させようとする見聞欲求の因子といえよう。

項目7, 4, 2に代表される第IV因子は、仲間や話し相手の乏しさ、つきあいの煩わしさ、孤立感といった、留村に伴う対人接触の寂寥感および無用の煩わしさを表す因子と考えられる。

第V因子は項目5, 1, 13等に高い負荷量をもち、農村収入の貧しさ、将来性への不安を意味するものといえよう。

以上、簡単に解釈を加えたが、流出類型の一応の因子

* 完全セントロイド法、直接バリマックス法も同時に試みたが、本データの分析には主因子解法が最適の解を得たので、これを用いることとした。

表8 内部相関行列

	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15
1	100														
2	12	100													
3	06	10	100												
4	62	22	24	100											
5	24	10	18	17	100										
6	11	07	13	11	17	100									
7	10	17	04	24	-01	04	100								
8	08	18	24	22	15	26	30	100							
9	07	09	21	18	08	20	12	31	100						
10	-00	07	23	12	-01	-00	08	14	30	100					
11	04	14	15	18	05	14	09	20	13	03	100				
12	06	08	14	02	18	06	03	12	09	05	17	100			
13	15	27	18	22	30	12	13	18	07	-05	23	22	100		
14	-01	12	20	12	08	10	-03	23	30	21	21	15	18	100	
15	01	03	16	11	17	15	09	36	33	20	18	21	15	36	100

(小数点省略)

表9 Varimax回転後因子行列

項目	因子	I	II	III	IV	V	h^2
1		-.14	.09	-.03	.14	.68	.51
2		.30	-.14	.09	.57	.14	.46
3		.21	.02	.56	.10	.30	.46
4		.14	.01	.28	.59	.17	.47
5		.20	.11	.04	-.06	.75	.63
6		-.02	.66	-.13	.03	.29	.54
7		-.09	.25	-.04	.73	-.07	.61
8		.14	.64	.15	.37	.05	.59
9		.01	.51	.52	.08	.04	.53
10		-.09	.04	.79	.06	-.06	.65
11		.60	.22	-.06	.22	-.13	.48
12		.60	.09	.02	-.16	.17	.42
13		.59	-.02	-.07	.28	.38	.58
14		.50	.26	.43	-.11	-.09	.52
15		.34	.58	.30	-.10	-.02	.55
	Σa^2_j	1.68	1.67	1.62	1.55	1.46	7.99
	寄与率	0.21	0.21	0.20	0.19	0.18	1.00

命名を、改めてまとめてみれば次のようになる。

F I 都会的イメージの職業への志向

F II 都会生活のもつ文化性への志向

F III 世間見聞の欲求

F IV 留村に伴う対人接触の寂寥感・煩瑣性

F V 農村収入に対する不安および貧困

ハ 流出類型の地域特徴

上記5因子について、Thomsonの回帰法によって個人別因子得点を算出し、地域別の平均を求めたものが表10であり、それをグラフ化したものが図1である。さらに、因子空間における各地域の個人因子得点の分布状況を、多次元正規分布を仮定して平均値のまわりに50%の確率楕円として求め、図示したものの一例が図2である。したがって、地域によるこの楕円の重なり合う部分の少ない程、因子得点のレベル（すなわち流出類型）での地域差の大きいことを表すわけである。図2は、5因子の組合せによる楕円の作図の結果、最も分離しているもののひとつであり、表10、図1および図2から知られるごとく、因子分析による流出類型のレベルでの地域差は認め難い。⁽⁸⁾ 性差も同様であるが、第II、第III因子において4地域ともに女子が上回っている点は興味深い。彼女らの流出理由（の認知）が、都會のものつ文化性や見聞欲求に根ざしていることは、就業動機などの職業意識調査にもしばしばみられ、裏付けられるからである。

因子得点の差に有意性は認められ難いものの、値の大きさの順位比較という観点から各地域の因子別得点順序を考察すれば、既に項目別地域特徴の項で述べた点と一致し、それを補強する結果となっている。最も特徴的なのが大蔵村で、都會の職業のものつ収入、内容等の好もし

* 多次元分布データに対する検定法は、種々の制約条件の満たされた場合にのみ用いられるような、極めて弱いものであり、したがって、ここでは「検定」という論理方式は全く踏んでいない。

いわゆる過疎地域の家族関係(3)

表10

地域別平均因子得点

地域	因子	地域別平均因子得点				
		I	II	III	IV	V
上 村	男	0.137 (0.101)	-0.038 (0.189)	0.374 (0.379)	0.362 (0.174)	0.115 (0.039)
	女	0.071	0.384	0.383	0.012	-0.027
大 蔵 村	男	-0.303 (-0.234)	-0.003 (0.150)	0.125 (0.179)	0.188 (0.225)	-0.233 (-0.127)
	女	-0.113	0.365	0.272	0.262	0.006
富 山 村	男	-0.014 (-0.014)	-0.156 (-0.124)	-0.266 (0.050)	0.093 (0.171)	-0.247 (0.055)
	女	-0.015	-0.094	0.342	0.243	0.334
頓 原 町	男	0.080 (0.009)	-0.207 (-0.083)	-0.287 (-0.172)	0.016 (-0.118)	-0.069 (0.007)
	女	-0.070	0.055	-0.044	-0.266	0.090

注) 括弧内の数値は地域平均を示す。

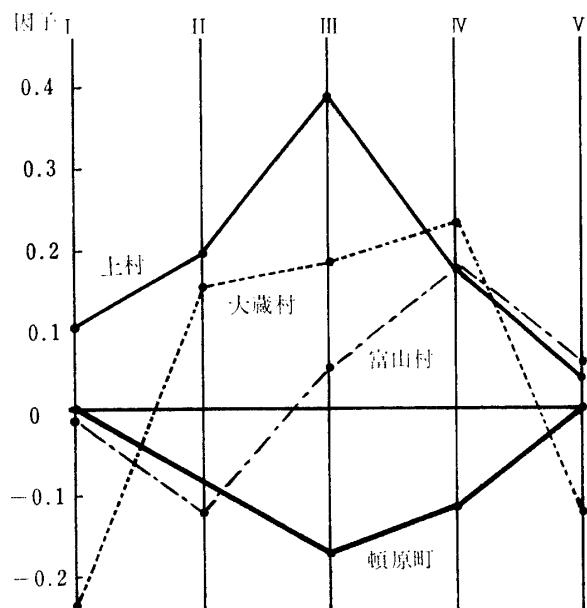


図1 地域別平均因子得点

さへの志向は低く、したがって、第V因子の農村収入への不安や貧困意識も低い。他方、出稼ぎを通じて得られる世間見聞や都会のもつ文化性への志向は強くもたれている。上村の場合は全てに高い値を示すが、特に第III因子には男女ともに高く、その背景については既述の通りである。それに対し、頓原町は全てに低く、都市化意識の進んでいることを第III、IVの因子得点が如実に表わしている。富山村は項目別平均値では上村と類似の傾向を示しており、特徴らしきものは窺えなかったが、図1にみられるように因子分析のレベルでは上村とはいくぶん様子が異って見える。特に、第Iから第IIIに至る都会的特徴を表わす因子において、上村に比べ低い値をとっている理由の一端は、飯田線を介して豊橋、名古屋に直結し、往来の頻繁なことが上村ほど強い志向性をみせない

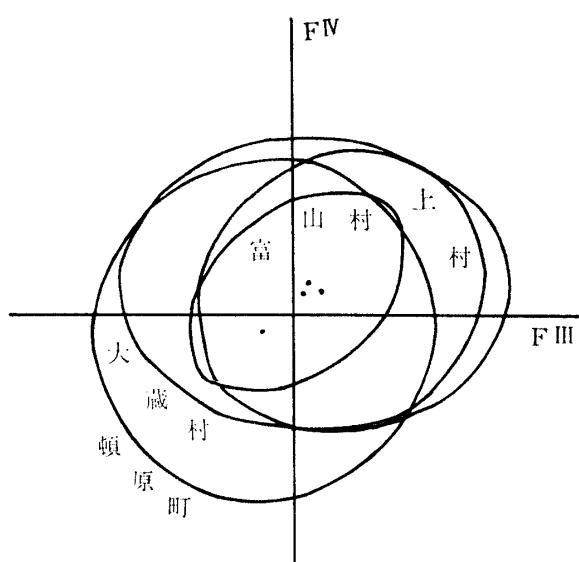


図2 確率楕円(50%)による因子得点分布の地域差要因としてあると思われる。

次に、命名した因子の妥当性を検証する意味をも含めて、表4に示した「将来の生活希望地」別の分類による因子得点の平均値を算出した。その結果が図3である。「中学（高校、大学）卒業後ずっと村にいたい」と態度表明した集団（図の「1」群）と、「都会で就職し、将来とも村に帰るつもりはない」と意志表示した集団（図の「3」群）の、二つの相反する態度の集団の間に因子得点の上でも全く対照的な結果を示すか否か、が分析の焦点であったが、図より明らかにごとくその仮説は支持され、したがって、因子命名の妥当性も検証されたと判断してよいであろう。さらに興味深い事実は、「若いうちは都会で働きたいが、いずれは村に帰りたい」とする集団（図の「2」群）は、「1」群と同様の得点傾向を示しながら、第III因子の世間見聞の欲求においては見事

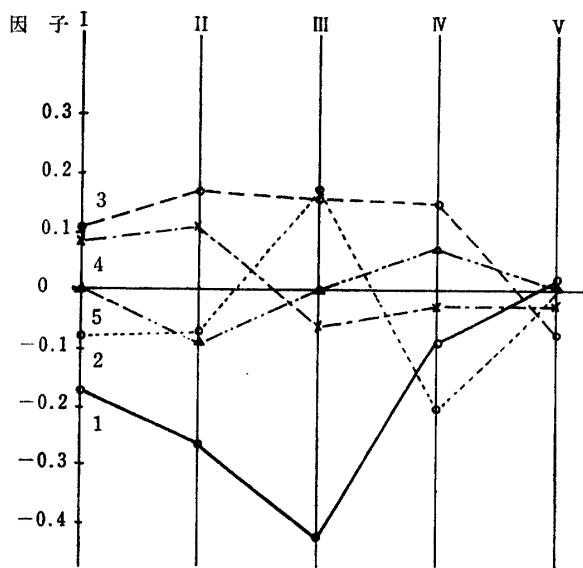


図3 将来の生活希望地別平均因子得点

な対照をみせていることである。これらの点からも、因子分析による流出類型の抽出結果は一応の信頼性と妥当

性をもつとみなして差支えないと考える。

3. 成人の留村理由の認知

青年の流出とともに、成人の留村が中学生たちにどのようなものとして把握されているかを探る目的で質問が企画された。分析は、前節の青年の流出理由の際に採ったと同様の方法を用いたが、項目数の少なさもあって因子分析等多次元解析は行なわず、項目別のレベルで留めた。結果は表11に示す通りである。

全体として、留村理由の認知で高い値を示したのは、村には気心の知れた人がおり、暖かい人と人との結びつきがあるから(6)、村の生活が苦しいといつても、多少の不便をがまんすれば食べていくには不自由しないから(2)、自分たちの村は自分たちで守りぬかねばという気持から(1)、都会に出ても、生活が楽になるというはっきりした見通しがたたないから(8)、など積極、消極入り混った結果を示しているが、総体的には消極的留村理由が優っていると認知しているように思われる。

表11 成人の留村理由の認知の外的基準別平均値と差の検定

	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10
全 体	3.63 (1.03)	3.70 (0.99)	2.60 (1.09)	3.42 (1.04)	3.46 (1.13)	3.88 (0.96)	3.02 (0.97)	3.62 (1.07)	2.59 (0.91)	3.28 (1.04)
上 村	3.82 (0.99)	3.80 (0.85)	2.52 (1.01)	3.51 (0.92)	3.40 (1.16)	3.90 (0.90)	3.26 (0.94)	3.66 (1.05)	2.38 (0.85)	3.00 (1.05)
大 蔵 村	4.12 (1.01)*	4.16 (0.88)**	3.00 (1.18)	3.16 (1.31)	3.50 (1.24)	3.90 (0.94)	3.24 (1.01)*	3.84 (1.01)	2.62 (1.15)*	3.30 (1.19)
富 山 村	3.32 (0.79)**	3.20 (0.89)	2.20 (0.89)	3.24 (0.91)	3.04 (1.25)	3.80 (0.98)	2.60 (0.80)	3.04 (1.11)	2.32 (0.88)	2.80 (1.13)*
頃 原 町	3.50 (1.03)	3.63 (1.03)	2.59 (1.09)	3.45 (1.04)	3.50 (1.09)	3.86 (1.00)	2.92 (0.98)	3.61 (1.08)	2.67 (0.89)	3.42 (0.98)
男 子	3.67 (1.04)	3.66 (1.02)	2.54 (1.09)	3.39 (1.04)	3.55 (1.14)	3.77 (1.03)	2.95 (0.94)	3.46 (1.07)	2.64 (0.94)	3.24 (1.02)
女 子	3.59 (1.02)	3.75 (0.96)	2.66 (1.08)	3.45 (1.04)	3.36 (1.11)	4.00 (0.86)	3.10 (0.99)	3.79 (1.03)	2.53 (0.88)	3.34 (1.05)
1 年	3.79 (0.97)	3.75 (0.85)	2.57 (1.12)	3.55 (0.99)	3.38 (1.12)	3.76 (0.93)	3.18 (0.96)	3.54 (1.00)	2.47 (0.79)	3.34 (1.13)
2 年	3.63 (1.04)	3.57 (1.11)	2.57 (1.05)	3.50 (1.06)	3.59 (1.11)	3.89 (1.02)	3.04 (0.95)	3.49 (1.16)	2.59 (0.96)	3.17 (1.02)
3 年	3.51 (1.05)	3.78 (0.96)	2.65 (1.09)	3.24 (1.02)	3.40 (1.14)	3.96 (0.90)	2.89 (0.98)	3.80 (1.00)	2.68 (0.96)	3.32 (1.00)

(表中の記号および検定法等の一切は表6の注1~3に準ずる)

次に、項目別に地域特徴をみると、大蔵村がまず挙げられよう。項目2, 1, 6, 8等に高い値が与えられ、村自体冬期の雪害に多少の不便はあるものの、村を守る

気構えも強く、生活するに十分ふさわしい場である、と認知していることが窺われる。この認知が、先の青年の流出理由のそれと表裏一体をなしていることは改めてい

うまでもないであろう。上村も大蔵村と類似の値を示しているが、大蔵村ほどの積極的留村意識はない、と認知しているようである。一方、頸原町は項目6を除いてとりたてていう程の高い値を示すものはないが、大蔵村、上村と有意差をもつ項目からみれば、別に自村での生活が不便でも不自由でもなく、気心の知れた人との結びつきでごく自然に日常生活を営んでいるものと認知している。富山村は頸原町以上に低い値を示し、全項目殆どが4村中最低である。低い値の意味するものは、「そうは思わない」という否定の論理であって、富山村の成人の留村理由の情報を何ら増すものではなく、したがって富山村の地域特徴は解明できないままである。ただ、佐久間ダムの造築で村の約半数の家が湖底に沈んだ、全国最小の村としての富山村には、10項目以外の何らかの積極的留村理由があるとも考えられるが、あくまでも推測の域を出ない。

将来生活を営むことを希望する土地の相違によって、現在村で生活している大人たちの留村理由の認知に差をもたらすことが予想されるので、その背景を明らかにすることを目的として、地域差の問題を離れて「将来の生活希望地」別の分類で、同様の手続で平均値を求め、差の検定を施したが、全項目に全く有意な差を認めることができなかった。このことから、成人の留村理由の認知が、中学生の自分自身の態度の反映として受止め、反応したものではないことが推測される。ここに、青年の流出理由の認知とは基本的に異なる構えの存在を感じることが出来よう。こうしたことが、多くの項目に地域差が現れながら、いまひとつ明確な地域特徴として浮び上らなかっただ原因に連がっていると思われる。

IV 要約と今後の課題

昨年われわれが訪れた、いわゆる過疎地域4町村の中学生に対し、人口流出の渦中にある彼らを流出予備軍として位置づけ、村の青年の流出理由、成人の留村理由を「認知」のレベルで測定した。地域内の共通特性を明らかにし、他地域との差異を見出すことを第一の目標にしたためである。

15項目より成る流出理由の認知については項目ごとの地域特徴が論じられ、次いで因子分析を行ない5つの流出類型を表わす因子を抽出した。そして、それぞれの因子について地域別平均因子得点が求められ、地域差との関係から検討された。地域を弁別するに有効な因子は必ずしも得られなかったが、傾向を表わすものとして概ね妥当と認められた。その5つの因子は次のように命名された。第I因子、都会的イメージの職業への志向。第II因

子、都会生活のもつ文化性への志向。第III因子、世間見聞の欲求。第IV因子、留村に伴う対人接触の寂寥感・煩瑣性。第V因子、農村収入に対する不安および貧困。

10項目より成る成人の留村理由の認知については項目ごとの地域特徴が論じられたが、地域差との関係で決定的なものは得られなかった。その背景のひとつを、中学生たちが直接自己とのかかわりの中で捉えていないことに求めたが、確認の意味でも今後の課題として残された。

以上の要約に則して今後の課題を論ずる場合、三つの点にまとめられよう。

(1)本調査項目は、諸種の現実的制約条件から、いわゆる過疎地域に実際に足を踏入れる以前に、諸文献を参考に作成された。したがって、実情に合わぬ項目の混入や重要な項目の欠陥が十分考えられる。それゆえ、われわれが面接調査を通して実地に得た体験と「研究資料」として別途に公刊した資料を基に改めて質問紙を構成し、流出類型を初めとする諸データの分析結果をより精練し、明確なものとすることである。

(2)質問票の再構成とともに、地域および対象を拡げ、より包括的な理論構成を目指す努力がなされねばならない。

(3)流出理由、留村理由という表層的な意識の相違が、より基底的な価値意識の差異に根ざすものか否か、あるとすれば如何なるものか、が明らかにされる必要がある。それはたとえば、社会的性格、生き方、社会的态度、時間的展望、等々からの追求が可能であろう。

参考文献

- (1) 続 有恒他 1970 いわゆる過疎地域の家族関係(1)…序報(その1) 一名古屋大学教育学部紀要(教育心理学科) 17巻 47-62
- (2) 米山俊直 1969 過疎社会 NHKブックス
- (3) 今井幸彦 1968 日本の過疎地帯 岩波新書
- (4) 兼清弘之 1970 人の動きと社会的空間 大明堂
- (5) 島根県教育研究センター年報No.1, No.2 1966, 1967
- (6) 広島県へき地教育連盟 1970 広島県における過疎地域の現状と教育
- (7) 山口県教育研修所紀要第55集 1971 過疎地域における教育体制に関する研究—農山村児童生徒の生活意識—
- (8) Thomson, G. H. 1951 The Factorial Analysis of Human Ability. 5th ed, London University Press.

<付記> 計算は教育心理学教室のNEAC-1240によつて行なつた。データ解析については教室の水野欽司助教

授に多大の御指導と御協力を得ましたことを深く感謝いたします。
(1971年11月24日)

附 錄

調査 II

名古屋大学教育心理学教室

中学校 年 組 氏名 _____

最近、中学校を卒業すると都会へ出る人が多くなっています。このように若い人们は都会へ行きたがりますが、一方では村で生活している人们も多いことと思います。それはなぜでしょうか。あなたの意見や、お考えをお聞かせ下さい。

1. 次の意見は、ある山村の若い人们が、「なぜ都会に出て行くか」その理由について調べたものです。これらの意見が、あなたの村の若い人们的「都会へ出て行く理由」とどれほどあてはまると思いますか。「たしかにそうだ」と思うときは「5」に、また、「どちらともいえない」と思うときは「3」に○をつける要領で答えて下さい。

あなたの村の若い人们が都会へ出て行くのは	そたうしだかに	そやうやだ	もどいちえらぬと	らあなてなりま	あいはま然らあなて
<例>山の仕事はあまりにもきついからです.....	5	④	3	2	1
1 将来を考えると農林業には不安があるからです.....	5	4	3	2	1
2 ひとり村に残るのは、何となくバカな人間のように思われるからです.....	5	4	3	2	1
3 村にいては、新しい知識や技術を学ぶことができないからです.....	5	4	3	2	1
4 村には話し相手や仲間がないからです.....	5	4	3	2	1
5 山の仕事はかせぎが不安だからです.....	5	4	3	2	1
6 山の仕事や農業がきらいだからです.....	5	4	3	2	1
7 都会ではめんどうなつきあいをしなくてもよいからです.....	5	4	3	2	1
8 都会の仕事ははっきりけじめがつき、レジャーを楽しむことができるからです.....	5	4	3	2	1
9 都会には多くの人が集り、活気があるからです.....	5	4	3	2	1
10 若いうちにいろいろと世間を見ておきたいからです....	5	4	3	2	1
11 都会の仕事のほうが危険が少なく、らくだからです....	5	4	3	2	1
12 都会で就職したほうが収入がよいかからです.....	5	4	3	2	1
13 村での生活は余りにもまずしく、みじめだからです....	5	4	3	2	1
14 都会には夢があるからです.....	5	4	3	2	1
15 都会の生活は文化的で、何かと便利だからです.....	5	4	3	2	1

2. おとなの人たちが村で生活しているのはなぜだと思いますか。あなたの意見や考えをお聞かせ下さい。

いわゆる疎適地域の家族関係(3)

村で生活しているおとなの人たちは	そた うし 思か うに	そや うや 思 う	もど いち えら ぬと	いうあ 思 ま りな そ う	思全 わ然 なそ う
〈例〉他の土地に移る気がないからだと思う……………	5	4	(3)	2	1
1 自分たちの村は自分たちで守りぬかねばという気持 からだと思う……………	5	4	3	2	1
2 村の生活が苦しいといつても、多少の不便をがまん すれば食べていくには不自由しないからだと思う……	5	4	3	2	1
3 都会に家族を連れて出るだけの金がないからだと思う	5	4	3	2	1
4 村の生活は、人間らしく、健康的だからだと思う……	5	4	3	2	1
5 先祖代々の土地や屋敷は大切に守っていかねばなら ないからだと思う……………	5	4	3	2	1
6 村には気心の知れた人がおり、暖かい人と人の結 びつきがあるからだと思う……………	5	4	3	2	1
7 村の仕事は地味であるが、林業は国土の保全、治山 治水といった面で国の役に立つと考え、がんばって いるのだと思う……………	5	4	3	2	1
8 都会に出ても、生活がらくになるというはっきりし た見通しがたたないから、村で生活しているのだと 思う……………	5	4	3	2	1
9 都会で働くより村で働くほうが、よりよい収入があ るからだと思う……………	5	4	3	2	1
10 村の生活が不便だとも、不自由だとも思っていない からだと思う……………	5	4	3	2	1

ご協力どうもありがとうございました